

Judith Williamson

女子 20 番はどうやってイデオロギーを理解したのか

砂川 誠司

【解説】

ここに掲載するのは、Judith Williamson (1981/2) “How Does Girl Twenty Understand Ideology?” (*Screen Education*, 40(Autumn/Winter), pp.80-87) (以下、「女子 20 番」論文と記述) の解説と全訳である。この論文は、イデオロギーの理解をどう促すかということテーマにし、学習者の認識のあり方と教師自身の認識のあり方に迫ろうとしたものとしては、メディア研究分野で最も初期の論文である。特に、教師としての自らの経験を頼りに授業の中に働くイデオロギーに着目し、学習者たちが学んでいるものは教師が教えようとしている内容ではないかもしれないといった考えを提出したという点で、この論文は当時のメディア研究の新たな方向性を切り開くものであった。現在では、メディア教育、あるいは批判的教育学の文脈において、こうしたテーマを論じる際には必読の論文であるといえよう。もちろんこの論文は授業や学習者の認識のあり方について論じているため、そうした文脈にだけ通用する考えを示しているわけではない。「女子 20 番」論文におけるウィリアムスの考えは、国語科教育においても無関係なものではなく、言語行為者たる主体が授業において発する声の意味を考える際に、参考になる部分が多いものと思われる。さらに言えばそれは、国語科教育における「リテラシー」をどう考え、またそれをどのように育むべきかということにも関わるものといえるだろう。

「女子 20 番」論文は、*Screen Education* (1971- 1982) というメディア研究誌の最終号に掲載されたものである。*Screen Education* 誌とは、SEFT (Society for Education in Film and Television) が発刊する学術誌 *Screen* 誌の別冊であり、映画研究によって明らかになった知識を教育の場でも使えるようなものにするという目的で刊行されたものである。「女子 20 番」論文は、当時活躍していたマニュエル・アルバラード Manuel Alvarado やヴァレリー・ウォーカーダイン Valerie Walkerdine、レン・マスターマン Len Masterman などの研究によって、メディア教育の方法論が構築されていくさなかに出されたものであった (詳しくは Manuel Alvarado, Edward Buscombe, and Richard Collins (eds.) (1993) *The Screen Education Reader: Cinema, Television, Culture*, London: Macmillan Press を参照していただきたい)。当時のメディア研究における教育への関心は、ウィリアムスンによれば、アルバラードの発言 (「個人の経験に頼らない教育学を構築することが必要である」) に集約される。それは研究的レベルでのメディア分析を、誰にでもできるような簡単な方法で一般化することを目指していたと言い換えられるだろう。そうした試みはマスターマンの著作 *Teaching Media*(1985) に結実していくことになる。こうした動きに対して敏感に反

応したデビッド・バッキンガム David Buckingham は、マスターマンの思考を対象化し徹底的に批判を加えた（詳しくは David Buckingham (1986) 'Against Demystification', *Screen* 27(5), pp.80-95 を参照していただきたい。「女子 20 番」論文はアルバラードやマスターマン、バッキンガムの議論に先立って書かれたものであり、上述のようなメディア教育の議論が行われている只中で書かれたものである。そして本論文自体は、アルバラードの見方への痛烈な批判であり、アルバラードが価値を置かない「経験」にもとづいた批判だからこそ、重要な説得力をもっている。またウィリアムスン自身、記号論者として広告の分析をすることをメインの活動としており（日本でも彼女の著作の邦訳として、ジュディス・ウィリアムスン著、山崎カヲル／三神弘子訳 佐野山寛太（クリティーク）(1985)『広告の記号論①②』柘植書房、J.ウィリアムソン[著] 半田結/松村美土/山本啓[訳](1993)『消費の欲望—大衆文化のダイナミズム』大村書店、が刊行されており、記号論者としてのその名前が知られている）、この論文を書くのにただならぬ気力が必要であったことが想像できる。論文のなかで、ウィリアムスンが教師として学生たちに攻撃的な口調でまくしたて、彼らをけなす場面が出てくるが、こうしたことを書くのは本当に勇気のいることである。こうしたことを文書として残しているところにもこの論文の価値はある。彼女自身、普段は学生たちをけなすような態度をとることを支持しないこと、またそれが危険な方法であることに触れているように、こうした方法が絶対的に有効だとは考えてはいるようにはみえない。

先にも書いたように、「女子 20 番」論文は、当時のメディア研究の新たな方向性を切り開くものであった。発表直後の反応は *Screen* 誌上でのいくつかの論文で議論されているのを見ることができ、むしろこの論文の意義が積極的に深められたのは九十年代に入ってからである。代表的なものとしては、Sandra Taylor(1991) 'Feminist Classroom Practice and Cultural Politics: Some Further Thoughts about 'Girl Number 20' and Ideology', *Discourse: the Australian journal of educational studies* 11 (2), pp.22-47、Sue Turnbull (1998) 'Dealing with Feeling: Why Girl Number Twenty Still Doesn't Answer', in David Buckingham (ed.) *Teaching Popular Culture: Beyond Radical Pedagogy*, London: UCL Press, pp.88-106、Marnina Gonick(2007) 'Girl Number 20 revisited: feminist literacies in new hard times', *Gender and Education* 19(4), pp.433-454、がある。タイトルを見てわかるように、いずれもフェミニズムやジェンダーといった切り口からの考察である。また、イギリスに限らず、オーストラリア、カナダでの議論である。特にターンブル Turnbull(1998)の議論は、「女子 20 番」論文に登場する学習者のひとりに着目して、授業における学習者の声（沈黙）の意味を説明するものであり、「女子 20 番」論文以後の議論としては参照されることの多いものである。「女子 20 番」論文に関するこうした議論の詳細については別稿で考察したい。

さて、すでに繰り返し用いている「女子 20 番」という聞きなれない用語であるが、「女子 20 番」とは、生活経験を通じてイデオロギーを十分に理解している存在の代名詞である。ウィリアムスンの授業を受ける出席番号 20 番の女の子ではない。この用語自体は、チャールズ・ディケンズの小説『ハード・タイムズ』における登場人物、シシー・ジュープ（チャールズ ディケンズ、山村元彦・田中孝信・竹村義和訳（2000）『ハード・タイムズ』英宝社。なお、翻訳文冒頭の一節は、この訳書から引用したものである。）を指す語からウィリアムスンが借りてきたものである。『ハード・タイムズ』においてシシーは、自らが住むサーカス団での経験から馬についてよく知っているわけだが、専制君主的な教師グラッドグラインド氏によってそうした経験による理解は無意味だと一蹴される。「事実」を重んじるグラッドグラインド氏は、シシーの考えは「空想」であり、世界を知

るために何の役にも立たないものとして片づけるのである。ウィリアムスンが主張するのは、むしろ経験を通じた理解の重要性である。彼女はイデオロギーを理解するまでに学習者のなかに何が起きているのかということ、授業を受ける学生たちの様子や彼らとのやり取りを手がかりに考察する。そして導かれるのは、『ハード・タイムズ』のシーがそうであったように、日常生活経験との関わりを通じて理解することであった。こうしたことを述べるための前置きとして、『ハード・タイムズ』における「女子 20 番」のくだりが論文の冒頭に引用されているのである。疑問形のタイトルにあえて答えるとすれば、「彼女自身の経験によって」ということになるだろうか。

ウィリアムスンの言葉の使い方は必要以上に難解である。省略が多く、用語の規定も曖昧な部分がある。翻訳も彼女の言葉のニュアンスを極力損なわないようにしたため、読みにくい点があるかもしれない。しかし、彼女が述べていること自体は、さほど理解に苦しむようなものではないはずである。ここで、その要点について簡単に触れておきたい。

ウィリアムスンは、自らがおこなった三つの授業（「グラフィック・オプション」、「メディアとコミュニケーション」、「フォトグラフィー」）を語るなかで、学習における経験の意味について、そして学習者の経験を扱いながら教育することの困難さを描いている。その困難さは、ウィリアムスン自身が言及していることだが、教師が関わり合っているイデオロギーに起因している。しかしウィリアムスンがこの点を見抜いていながら、その困難さを克服できないのは、皮肉なことに彼女自身が関わり合っているイデオロギーによっている。それは次のような考えに端的に示されている。「イデオロギーを教えていかなければ、それは常にどこか他の人たちが考えるものだということになってしまい、その人たちがなぜ「虚偽」や「プロパガンダ」のようなものを信じるのかということに対する唯一の可能な説明は、その人たちがばかだから、ということになってしまう」。彼女は学習者もつイデオロギーの理解は不十分なものだという前提に立っている。しかし、これは彼女の関わる学習者観のイデオロギーだったのである。彼女は学習者の経験がイデオロギーの理解を左右するものであると考えているのだが、学習者たちの「自己」にとってなぜイデオロギーの理解が必要なのかということについては、十分に考えられていない。もちろん、それを考える萌芽的要素はある。例えば「なぜ彼らは、彼ら自身の極めて限られた家庭生活や学校生活からかけ離れたものでもかかわらず、揺るぎない立場に立たなければならなかったのだろうか。それから、私は何に挑み、変えようとしたのか。彼らのテレビに対する見解なのか、それともストライキやアイルランド人の政治に対する見解なのか」といった発言である。彼女はその答えを明確にはしていないものの、自らの立場に疑問を投げかけることまではおこなっている。

もしかすると私たちもウィリアムスンと似たような立場に立っているかもしれない。学習者自身の思いや願いを尊重するといったなかに、教師としての立場を見えなくするような論理が働いているかもしれない。現代的なメディア教育研究が本格的に始まる黎明期に書かれたものであるからこそ、彼女がどのように問題を捉え、苦悩していたのかを知ることは、価値のあることと思われる。その善悪の判断を急ぐ前にまず、彼女の議論を丁寧に扱うことから始めることが必要だろう。

## 【翻訳】女子 20 番はどうやってイデオロギーを理解したのか

「女子二十番は馬を定義できない！」 グラッドグラインド氏は、小さな水差したちみんなのために言った。「女子二十番はいちばんありふれた動物の一つについて何の事実も知っておらん！ 誰か男子に馬の定義をしてもらおう。ピッツァー、お前の定義を言いなさい」

「四足獣。草食性。四十本の歯、つまり二十四本の臼歯と四本の犬歯、それに十二本の門歯。春に毛が抜け、沼の多い地方では蹄も抜け落ちます。蹄は堅いけれど蹄鉄を打つ必要があります。門歯表面の溝の具合で分かります。」 こんなふうに（そしてもっと多くのことを）ピッツァーは答えた。「さあ、女子二十番、これで馬がどういうものか分かったな」とグラッドグラインド氏は言った。

（チャールズ・ディケンズ『ハード・タイムズ』）

「個人の経験は、必ずしも人にイデオロギカルなことがらについて深く教えたりしない。・・・したがって、まさしく個人の経験に依らない教育学を構築することが必要である。・・・」

（マニユエル・アルバラード『スクリーン・エデュケーション』第 38 号）

「グラフィック・オプション」の授業の二年生たちと私は、いくつかの少女漫画から抜き出したスライドを検討しているところである。これはその授業での「典型的な」一場面である。私たちは「メディアのなかの女性表象：神話・慣習・記号」を検討しつつあった。このタイトルは私が選んだわけではない。しかし、そのタイトルが何を意味し、何を教えるように期待されているのかということは、その授業を引き受けたときに正確に理解した。おそらく『スクリーン・エデュケーション』誌を購読している教師なら誰でも理解しただろう。だから私はすぐさま、関連する諸論文、使用すべきいくつかの映像、例えば映画、ポピュラー音楽、広告、雑誌の一節を思い浮かべることができた。それらは学生たちの身近にありながら、新しい理論的研究をも取り込んでいる。こうして、私たちは少女漫画を検討しているのである。なぜなら少女漫画は簡単に利用できるし、学生たちの近くに少女漫画に関する良質の研究があったからである<sup>1</sup>。そして私は、少女漫画がどのように女性らしさを表象しているかということ、この女性らしさという語を用いずに論じようとしている。少女漫画は女の子をどのように表現しているのか。女の子の人生や女の子がもつ期待や恋愛をどのように表現しているのか。母親や父親はどのように表現されているのか。女の子と男の子の関係はどのように描かれているか。私たちが話し合っているのはこうしたことについてである。この授業は男女混合なので妙なことだが、おそらく、プレゼンテーションの話題として少女漫画を選んだのは男の子である。彼は、他の教師のところでおこなった作業を参考にしたのだろう。彼は意図的ではないだろうが、何が認められるだろうかということ—この場合、何が大部分のフェミニストの教員から認められるだろうかということ—をよく知っていたのだ。私は密かにそう確信していた。学生は、何が認められるかをよく知っているのだろう。しかし、かすかに感じていたのは、彼が少しいい子ぶっているということである。私たちが今検討している材料を、彼は慎重に集めてきたのだ。それは女の子たちが必然的なハッピーエンドを演じるような描写である—「ああデブ、信じてかまわ

<sup>1</sup> McRobbie Angela 'An Ideology of Adolescent Femininity' CCCS Stencilled Paper University of Birmingham を参照のこと。

ないのね?」「そうだよ、ずっと愛してる」。彼は「これがずっと続くんだよ」などとささやく。教室全体は要領を得ているようで、その描写の分析ができないということはほとんどない。これは明らかにつまらないロマンスで、その中で女の子たちはどうしようもないほどか弱く、目が大きく描かれている。ストーリーは、たとえば、それはもうジョークというほかはなく、笑ってしまうようなものである。「彼女の目は涙でいっぱいになった。ベンは車に乗って行ってしまったのだ。彼は二度とハイクリフ・ホールには戻らない…。」傑作だ。

私にはなぜマークがこの話題を選んだのかが分かる。この話題を選べば作業が簡単になるからである。ある意味では、女の子たちがどれほど間抜けに描かれているかということは誰にでも分かることである。しかもそれが分かることが、要するに「グラフィック・オプション」という授業なのではないだろうか。マークは私に認められるだろうと思っている。しかし彼の教材に対しての貴重な意見をたくさん含んでいる一注意深いプレゼンテーションを検討するにつれて、私の身体は彼のどこか軽蔑した口調に震えた。どのみち女の子たちはこながらくたみたいなものを読むのではないだろうか。マークのプレゼンテーションは、単に女の子がばかだと示し続けるだけである。だから問題は教室に公然と生じる。なぜ女の子たちは少女漫画を読むのだろうか。その物語がどのくらい非現実的で、その描写がどのくらいくだらないのかということ、私たちは少し見ただけで分かる。そうであるのなら、なぜ女の子たちは少女漫画を読むのだろうか。はっきりと確かめられたのは、少なくとも男の子たちにとっての答えは、女の子はいくぶん愚かで間抜けだからということである<sup>2</sup>。さて、ところで彼らは一体何を学んだのか。確かに私たちは表象に関する、つまり、記号や慣習に関する学習をその朝に行った。しかし私たちはイデオロギーに触れることはなかった。思想としても、実生活においてもそうである。だからこそ学生たちは理解していないのだ。イデオロギーという言葉は(すでに!)非常に時代遅れであり、その言葉を使い続けることで私は、遅れてきたアルチュセール主義者か、実のない社会学者のように感じさせられるのだ。それはイデオロギーという言葉も概念も、『スクリーン・エデュケーション』誌における最近の多くの著作から欠落していることにはっきりと表れている<sup>3</sup>。私は、イデオロギーという言葉が定義の曖昧な用語であること、またイデオロギーの働きについて諸説があるということをも十分承知している。つまり特定の理論を組み立てることも、その意味を問うこともなく、イデオロギーという言葉を用いることは、ひどく認識が甘いようにみえるということである。(「イデオロギーとはどういう意味ですか。」)しかし、理論的な取り組みと教育との間にははるかに大きな隔りがある。理論的な取り組みは着実に先に進み続けることができる。それが人々により多くの報酬とより良い経歴をもたらすことになっているのであれば、進み続けなければならない。人は何か新たに述べるべきこと(ないしむしろ書くべきこと)を見つけ続けなければならないのである。そうして理論は何かを際限なく分割するようにして発展し、再定義される。学問の世界におけるこの暗部を探る古典的な例は、研究のア

<sup>2</sup> アルバードは次のように述べる。「男の子たちが女の子になる個人的な経験はないし、したがって経験を通じて性差別について書くことはできない。—彼らは差別を助長するような社会的分析について学び、立ち向かわなくてはならない…。」私は、男の子たちには性差別の経験がないというのには賛成しない。それはちょうど彼らの経験のほとんどが支配的であるということである。そして私の経験では、この授業にまつわる話のように、一人での分析が彼らの態度を変えることはないだろう。

<sup>3</sup> すべてではないが。ジョン・エリスは彼の映画研究の一部で議論している (*Screen Education* n38)。

アイデアと論文のタイトルが人によって異なるものでなければならないということである。だからあなた（おそらく）誰も他に上げなかった話題を探し続けるのである（なんて排他的なことだろう！）。同様に、学術誌に書く世界では、絶え間なく変化し続ける運動（それは実質的に「発展」という考えである。つまり新しいアイデアは、古いものよりもよりよい、あるいはもっと正しいのだということである。それは全体的に実証主義のナンセンスに違いない）がある。その運動は、現実的には流行の言葉や思想を明らかにすることができる。だが「イデオロギー」は、明らかに流行のものなどではない。

しかし教育は、現実の学生たちの特定の段階においては、具体的な状況に根ざしたものである—あるいはそうあるべきだ。だから教育は新しいことをたくさん説明することではなく、むしろ同じ基本的なことを何度も説明したり、基本的なことを別の言い方で説明するいくつものやり方を見つけるのである。このことは私の著作の理論的なレベルが基本的なものである理由であり、この点で私は、実践上の問題に関心を抱いている。技術系や芸術系の学校を中退するような、たいていは18歳の学生たちに対して、どうやってイデオロギーという概念を理解させることができるのだろうか。私にはその方法が欠けているために、オウムがえしの学びを学生に求めないかぎり、人は価値あるものをまったく何も教えられないのだと本気で考えてしまう。「実践的」問題を別の角度からみることこそ、この論文が実行することであるが、それは一方で、非常に重要なさまざまな理論を取り込むことだろう。というのも、これまで主観性、意識、主体の形成、主体の脱構築などについてはとてもたくさんの方が書かれてきたからである。それはさておき、話を「グラフィック・オプション」の授業の二年生たちに戻そう。

「グラフィック・オプション」の授業の二年生たちは、女の子たちが愚かにもまわりの状況の変化に影響されてしまう本当にか弱い存在に違いないと考えている。彼らが本当にそのような存在であってほしいと思っているのなら、確かに彼らはそうした存在とは異なる存在なのかもしれない。そのクラスは大部分が男子のクラスである（彼らはこの選択授業が簡単に単位を取れるものと思っていたのだろうか）—しかし同じクラスの三人の女の子たちはどう考えているのだろうか。最悪に問題なのはアストリッドである。彼女の見た目は、実際、コミックストリップの金髪のヒロインに酷似している。彼女の自己イメージは明らかに私たちが攻撃しつつあるようなものと一致するのである。彼女は教室の前に座り、文字通り、無言である。彼女は爪を磨いているかもしれないし、じっと何かを見つめているかもしれない。だから私は本当に彼女のことが心配だった。私は、他の二人の女の子たちと一緒に教えようとさそってみるのだが、彼女はことさらそうしたいとは望んでいない<sup>4</sup>。

他の二人の女の子とアストリッドとは別に会って話をした。その話は放課後に食堂で始まった。私たちは食事について話し始め、そして容姿の話題に触れた。二人とも肥満について問題を抱えていたのである。そこで私たちは、自分の理想と、それに対して自分がどうあるべきかについての感じ方とのギャップや、食べるべきでないと感じているけれども、食べたいと思うような、食事に関する一連の症状に関する諸々の感情について話しはじめた。その感情は私たちに、男の子たちが

---

<sup>4</sup> アストリッドは、アルバラードが示唆しているような（『スクリーン・エデュケーション』の記事を参照のこと）、性差別について「分析的に」学ぶことのできない人の好例である。なぜなら、性差別主義がまさに彼女自身の経験と一致するからである。

持つよりもさらに強く、無意識で、<sup>イデオロギカル</sup>観念的な行動という考えを持たせるのである。私たちはダイエット製品の広告と食料品の広告を見ていた。そこで私は『肥満はフェミニストの問題である (Fat is a Feminist Issue)』を持ち込んだ。二人ともその本を読み、それに関する共同作業をすると決めた。二人は2時間目の授業を早退していたので、私たちは一緒にこの作業をすることができた。次第に私は、二人は男の子たちと一緒にうまくいかないと感じるようになった。二人を担当する他の教師たちがこの時間を許してくれたことは幸運だった。そして私は、この種の話題にとっての男女別々の授業の価値を真剣に考え始めた<sup>5</sup>。この感覚は、ジェニーとサンドラが授業の最後にプレゼンテーションをしたときにより強くなった。男の子たちは信じられなかった。彼らは、もっと痩せたいのなら食べる量を減らすべきで、それには何の問題もない、と考えたのである。そのうえ、女性はほっそりとした体形を維持すべきであり、それは倫理的な問題だと考えた。「毎晩歯を磨くよねーきちんと自分を管理しないのにはうんざりだね」、「君は元気で健康を維持すべきだよ」、また、一番悪いのは「うーん、どんなにきれいな子でもデブは興味ない」とか、「彼女をずっと痩せさせときたい」というものである。

さらに、そのような発言に関する議論に入ったとき、男の子たちはずっと女の子の邪魔をし、けなし続けた。もっともけなし続けていたのは、本質的に根っから悪い男の子たちではなかった。そして私は彼らがとても好きだった。しかし、またしても彼らは、女性の食欲過多以外に、問題を見出せなかったのである。彼らはかなり傲慢で自信過剰である。私は何週間も彼らに<sup>イメージ</sup>描写と認識について考えさせるよう試みた。そこで私はその授業を、歴史的なアプローチ、別々の時代の<sup>イメージ</sup>描写、別々の制度の議論から始めた。しかし彼らは全く個人的に、自分の自己でもって、つまり自分の女性に対する認識、したがって自分の男らしさでもって反応し続けた。いやむしろ反応しないままだった(経験を「無視」したのだ)。だから私は彼らを個人的に非難し始めた。言ったことをすべて思い出すことはできないが、かなり荒々しかった。彼らをけなし続けたのである。私は心から信じていることを言った。それは、自分自身の頑固な認識が打ち砕かれない限り、きみたちは決してどんなことも考えることができないだろうということである。私は自分が彼らの何を憎んでいるか話し、そしてその授業を教えることについてどう感じているかを話した。きみたちは今までにみた中で最も痛ましくて、子どもじみた連中だと言ってやった。彼らは明らかに動揺した。私は、何カ月も彼らを教える中で、彼らの心をすっかり変えてしまったのはそれが初めてだと感じた。私は子どもたちをけなすことを滅多に支持しない方だったので、これは一か八かの賭のような行為だった。しかし何人かの男の子がその後、「僕は、先生がそのように感じているとは知りませんでした」とか、「僕たちは本当に先生が言ったように振舞ったのですか」などと言って私に近づいてきたので、けなすことにはそれなりの価値があった。また、ひとつの大きな成果は、キースの発言内容であり、これまでの私のあらゆる理論的な取り組みでは書かれず空白となっていたことを彼が述べたことで

<sup>5</sup> …男の子たちにとっての、おそらく「男性のイメージ」とともに、あるいは少なくとも男らしさについてのいくつかの勉強とともに、女性のイメージとともに。その半分は目をギョロつかせたものであり、女性の観客としてのそれら位置づけは固められている。私は『10』という映画(それは男らしさの危機を表象することにとっても関心を注いでいる)を授業で見せた。そこでは男の子たちは、ダドリー・ムーアや「男らしくない(un-macho)」男性などについての質問を完全に無視しているのである。なぜなら彼らはボー・デレクのおっぱいに夢中だからである。

ある一「たぶん、僕たちはそれと気づくことなくこうした出来事を考えているんだと思います。そうしたことを自分自身でやっている最中に知るの、難しいことなのではないでしょうか」。

その日は男の子たちに大勝利した日であり、それ以後、ものごとは改善された。しかし男の子たちと女の子たちとの対立は女の子たちにとって全く良くはならなかった。女の子たちの新しいアイデアが男子たちの軽蔑に直面して崩されるにつれて、私は彼女たちの味方をするほかなかった。女の子たちが学んでいるものは、男の子たちから攻撃されなければ、十分に理解することの難しいものであった。一方で、男の子たちが必要としていたものは、彼らにとって面倒なことを作りだすための強い暴力的攻撃であった。あなたは、彼らが何も確かなものを見出さなかったと思っただろう。彼らは愛らしくて不用心で自信たっぷりの、肩を振りながら歩くタイプだった。ちなみに、ほとんどすべてのグループは労働者階級であり、いろいろな意味で階級意識を共有していた。その意識にはまさに、私が壊そうとしていた非常に著しい性役割がはっきりと組み込まれていた。

私は時々『スクリーン・エデュケーション』誌において取り上げられる教育がセックスのようだと感じるので、こういうことを詳細に記述しているのである。つまり、あなたは他の人たちがセックスしているということをご存じだと思うが、その人たちのセックスの中身、あるいは彼らのセックスのやり方をあなたは決して正確にはご存知ないだろう。マニュエル・アルバラードが言っているのは、個人の経験に頼らない教育学を構成することが必要だということである。それから彼は、「文化的ヘゲモニー」について教えるべきだと言いつづけている。彼がどうヤルのか、ぜひとも知りたいものだ。

女性のイメージについてのごく普通の授業を教えているがために、そしてそのイメージは、誰もが背景を知っているものや考え方と関わっているの、私は学生たちの経験を直接的に扱わなければならなかった。テレビ、イメージ、文化といったことではなく、むしろ彼ら自身のアイデンティティを扱ったのである。女の子たち（とりわけ彼女たちは少数派であるために）とともに、この授業は、ある意味では彼女たちの自己イメージを強化しようとする試みを伴っていた。彼女たちの自己イメージには脱構築の必要などなかったのだ。なぜならそれはすでに脆いものであったからだ。こうして彼女たちは、すでに部分的に知っているものを考えるための、十分な自信と自己感覚を持つことになったのである。女の子たちはすでに自分自身をけなすことがずっと簡単なことであるといつも分かっていたし、ある意味では男の子たちの女性のイメージに対する見方に同意していたのである。しかし女の子たちは、男の子たちよりももっと、すばやく学習し理解した。なぜなら彼女たちは危機に瀕していたからである。そもそも男の子たちは考え始める前に、意図的に危機的状態に放り込まれなければならなかった。そして、全ての学生たちにとって、（必ずしも自己啓発の必要はないと思うが）自分自身の経験と私が教えようとしたより「理論的」な概念とのあいだにあるべきはずの失われた環とは、イデオロギーについてのある一つの理解である。誰でもイデオロギーに関わっているという考えは、批判的思考の第一の可能性の根底にある。なぜならそれは「あたりまえの」認識、あるいは「絶対的な」認識というものは存在しないということを示しているからである。文化相対主義の考えなしには、真に探求的な思考は不可能である。なぜなら自分自身の前提は決して疑問視されないからである。教える子の年齢が高くなるほど、自分自身の前提を疑問視することは難しいことだと思われる。ある程度、教えることが、こうした探求を導くのであれば、教えることはそれ自体が社会的変革の必要条件となる。幼年期以降、そして言語そのものの学習の後に可能な最も大きな精神的突破口は、人間の言語と思考が不変ではなく、自然のものではないと理解することである。学生たちが大学を卒業する際にこのことを理解していることが、教育が彼らに

対してなす最良のことなのである。

学生たちが個人的に危機的状態にならなくてはジェンダーについて教えることはできないのだと分かってはじめて、私は「イデオロギーの概念」をジェンダーイメージについて教えることの必要条件と見なすことをやめた。順序が逆だということに気付いたのだ。私はジェンダーイメージ、そしてその他に私が手に入れることができたものはなんでも使っていた。正確にはイデオロギーの理解を演出するために使っていたのである。学生たちが「イデオロギーという概念」を学んだのは、女性のイメージを通じてなのか、テレビの歴史を研究することを通じてなのか、ただ教室でのおしゃべりを通じてなのかということ、つまりどんなことについてであれ最終的には実践しなければならぬということ、私は全く気にかけていなかったのである。

これは「メディアとコミュニケーション」の一年生たちに起こったことである。この授業で私たちはテレビと新聞を研究した。また私は（報道と出版の歴史を含む）平凡な作業を行っていた。しかし学生たちは、『コロネーション・ストリート<sup>i</sup>』あるいは『クロスロード<sup>ii</sup>』を観ている人たちは頭が悪いに違いないと考え、こうした番組によって大衆の無知が促された<sup>iii</sup>と考えるのではなく、むしろ証明されたのだと決め込んだのである。その視聴者たちが『サン』、『デイリー・スター』、『デイリー・ミラー』<sup>iii</sup>の読者でもあったためである。そんなことはメディアを分析するのにほとんど意味がないと、私にはなかなか言えなかった。学生たちはテレビの過去の歴史を知ることやテレビ番組全体を「脱構築する」ことはできるけれども、いまだにそういった番組を見る人たちがばかだと考えるのである。学生たち自身の経験のなかに似たような状況を見つけ、それを彼らに問題化してやらなければ、彼らは「テキスト」と「読者」<sup>イデオロギカル</sup>との間にある観念的な関係性を把握することは決してないだろう。

この一年生たちに対して私は、ニュースの表現にどのようなバイアスが掛けられているかを示そうとした（再び、古典的な教材、つまりストライキ、労働組合、テロリズムの報道を用いた）が、うまくいかなかった。なぜなら、見出しや記事によって伝えられる見解は、すでに彼ら「自身」の見解だったからであり、かれらはそのストライキが扇動家によって引き起こされたのだと本当に考え、IRA（アイルランド共和国軍）はテロリストだから殺されて当然だと考えたのである。だから私は彼らにニュースのバイアスが「見える」ようにするのに苦労した。なぜ彼らは、彼ら自身の極めて限られた家庭生活や学校生活からかけ離れたものであるにもかかわらず、揺るぎない立場に立たなければならなかったのだろうか。それから、私は何に挑み、変えようとしたのか。彼らのテレビに対する見解なのか、それともストライキやアイルランド人の政治に対する見解なのか。

結局私は別の角度からアプローチした。このグループのもう一つの大きな問題は、ジュニーとサンドラのように、自信の欠如だった。彼らは中退者であり、そして教師たち（あるいは何人かの私の同僚たち）によって、彼ら自身の考えを考へてとして扱われてすらこなかったのである（彼らだって漠然とでもものごとを考へてはいたのに）。彼らは絶えず過重に勉強させられ（彼らは大学に九時から十八時まで拘束され、そのうえに予習の時間も持たされた）、評価されることに神経質で、講義にビクビクさせられていた。彼らは熱心であり、この上なくひたむきに勉強したのであるが、彼らの抱えていた主たる問題とは、そのとき、実は教育そのものであった。彼らは自分たちが教えられているその方法について（もしくは彼らの時間に対する法外な要求でさえ）、たとえそれが彼らにとって莫大な問題を引き起こしていたにもかかわらず、疑わなかったのである。週に一回、午前九時からの一時間、私が彼らとおこなった「理論的な」ことも、まさに余計な精神的負担となっていたのだろう。そこで私たちは、彼らの受けている他の講義について、質問をすることの恐怖に

ついて（これは誇張なしの文字通りのことである。彼らがばかだとみなされているような時、彼らはクラスで質問をすることを怖がっていた）、さらに「知識」についてこのことが何を意味するかを話し合い始めた。私たちは彼らの実践的取り組みを考察し、そして私は彼らの稽古場に一相補的な諸々の研究の境界線を越えて一足を踏み入れ始めた。その一方で私は、自分の嫌いな作品よりも好きな作品を常に取り上げ、学生たちの自己イメージが一種の基本的な記号論とどう連動するかを議論しようとしたのだった。私たちはまた、大学での問題全般について話した。だからその1時間は文字通り一種のセラピーとなった（ここでおそらく読者の皆さんはうんざりするだろう）。その時間に彼らは、彼らの状況における主な危機であったことを何とか解決した。その年の暮であったが、彼らは、自らの状況についてより多くの見方を持つようになると、秋にはじめて取り上げたメディアについての考えをよりいっそう把握し、それに疑問を持つことができるようになった。もちろんそれは同時に、彼らが新たなひどい問題に直面させられたということでもある。だから彼らが相対化して見ることを学んだ最初の対象は、彼ら自身が受けている教育だったのだ。教育が彼らを形づくっているということは、これまで決して疑うことのなかったことである。そしてこれこそが彼ら自身の批判的な刃で切り刻んだイデオロギーだったのである。

だから私は、彼らの幸福や願いをじかに妨げる、ないし経験の変化と対立するものを信じながら、自らの信念やイデオロギーが学生たち自身の関心の的になり、彼らがまさに矛盾にとらわれているときに、彼らに「見えないもの」、つまりイデオロギーが、最もよく「見える」ようになるのだと言いたい。私は、一部の男子たちがフェミニストになろうとするときのように、人が抽象物を学んだり、道徳的な目的で学んだりするとも思わない。私は、数人の三年生たちが作っていた女性に対する暴力についてのビデオの中で、話すよう求められた。彼らはみな男の子だったが、彼らには（私ではない）フェミニストの教師がついていた。彼らは映画における暴力や性差別的な表象について議論していた。一しかしそれはその男の子たちにとって何の意味もないものであり、彼らに響くことはない。私は彼らに、私や他の女性を撮るかわりに男性についてのビデオを撮らないのはなぜか、あるいは性差別をめぐるこのビデオ自体について自分たち自身話さないのはなぜか問うてみた。彼らは、英文学専攻の学生が中世詩を、歴史学専攻の学生が「チューダー家の人々」を「演じる」かのように、女性のイメージを「演じている」のだった。

このような教育の重要な点は何だろうか。それはどのような知識を保証するのだろうか。さまざまな概念の価値は、究極的には、ものごとを変えるために一必ずしも物質的なことを変えるためではなく、むしろ私たち自身を変えるために一学生たちがそれをどう使うかということにある。ただひとつ教えていくなかで私が理解できたのは、このことを可能にするということである。そして、そのような変化が抜き差しならない意味を伴って生じるとき、それはまさに忘れられない衝撃を与えるものとなる。これまで私は、学生たち自身が、そう彼らに、いつもとは違ったかたちで、より広い価値や概念の社会的体系の一部として、あるいは自分たちが意識的にはコントロールしなかったものとして、ものごとを考えたり、感じたりさせるように示唆することができると確信したやり方のいくつかについて述べようとしてきた。すでに述べたように、どんな人にも純粋に頭だけで分らせるのはほとんど不可能である。そして、彼らがそのことを本当に分かるようになると、つまり彼らが当たり前のように見なしてきたものは実はすべて相対的であり、自然だと思っていたものはすべて構成されたものであり、それらの存在がすべて脱構築できる、といった考えを持つと、彼らは立ちすくむ。自分たちがイデオロギーに関与しているという考えは、彼らがこれまでにあたりまえだとしてきた「自由な自己」の感覚を弱めるのである。彼ら一人一人のアイデンティティは疑

間に付され、そこに確実な足場や「真実」はない。あるのはただ、言説とカテゴリーだけである（不幸な人々である。私はこれら二つの特に感じの悪い言葉から彼らを守り、そのかわりにイデオロギーとステレオタイプ、時代遅れの教員についての話をする）。皮肉なことに学生たちは、ことを理解すればするほど完全に途方に暮れてしまった。もし私たちが社会的言説を通じた主体の形成などのことについて書き、そのうえ私たちの教育の矛先を社会的言説に向けるつもりなら、私たちはそうやって作られた主体の、まさしくその根本そのものを切りつけているのだということを知っておくべきである。イデオロギーのような諸理念がどれほど恐ろしいものであるかということを示すこともなく、それらを学生たちに理解させようとするのは、まぎれもなく無責任であるように私には思える。

私が初めて、本当に学んだことは、私の持つさまざまな考えがすべて私「自身の」ものではないということ、そして社会的現実こそ観念的であるということである。そのことを学んだのはメディア研究を通じてではなく、むしろ大学一年での社会学の授業である。新しい環境での心もとない時期に、ある本<sup>6</sup>を読むことによって、あらゆるものに対する私の見方は、それ以来ずっと変わってしまった。少ししてから私は日常的な落ち着きを取り戻した。しかししばらくの間、私は「真実」だと思ってきたすべてのことに対してその本質を見抜いたように感じ、自分が思ってきた人としてのわたしは存在していないのだと感じた。なぜなら、私は社会的概念によって構築されたものだったからである。そして私は、魂が抜けたように透明な世界をさまよい歩いた。それから、最終的に、一度に二つのことを心に留めておこうとする困難を引き受けたのである。その二つのこととは、合理的で健全な生活のために必要な現実の感覚と、「現実」が観念的に組み立てられているという知識である。それはもう何年も前のことであり、これらが互いになじまないもので、抱き合わせるのが難しいと今も感じている。また、主体の脱中心化、断片化と社会化、表象、セクシュアリティ、および無意識に関するすべての著作のどこに、これらの現象について書かれた文章のどこに、それらが生かされているだろうか。そのようなことについての諸々の理論が有効でないと言っているのではない。「自己」と表象をつなぐのはそういう理論だと言っているものであり、それらの理論によって、教育がどれほど脅かされることになり、学生たち自身の経験や彼らの見慣れたアイデンティティにどれほどの疑問が付されることになるかを示すことになる。

私が教えている学生たちのうちで、この最悪な事態に見舞われてしまったグループは、「フォトグラフィー」の授業の三年生たちのグループであった。彼らは、卒業年次には、どのグループよりも成績が良かった。また、私たちは通常とは異なる高度なレベルで取り組んだ。あまり興味を持ってくれないいくつかのクラスのために、普段なら一人で読んでもっとわかりやすくかみくだいて説明するだけの理論的な文章<sup>テキスト</sup>を、私は彼らとたくさん読んだ。しかしこの人たちは上首尾に取り組み、フロイト、マルクス、ソシュールを、そしてアルチュセール（をちょっとだけ）とスチュアート・ホールを読んだ。もちろんロラン・バルトも。彼らは、私がこれまで教えてきたどんな学生たちよりも、表象のイデオロギーをいっそう深く理解した。しかし問題は、何人かの学生たちが実際の活動をおこなうことが不可能だと感じたことだった。彼らはみなかなり政治意識があったため、それが問題をより悪くした。彼らはイデオロギーに支配されると感じており、その感覚は、彼らが何か

<sup>6</sup> 偶然にもピーター・バーガーによる『社会学への招待』（邦訳：水野節夫・村山研一訳、思索社、1979年、新思索社、1995年）であった。

を実際にやってみることを妨げた。それは彼らが実際に何かをすることが十分にラディカルではないと考えていたからである。私たちは、イメージの脱構築に多くの時間を費やしてきたので、彼らは、イメージを組み立てることについて自意識過剰になってしまった。そして二年間に渡る慎重な作業—こんなことはよくご存じだと思うが、それはまるで記号論や観念的な装置を彼らが理解すべきだという道義でもあるかのようにである—の後、「難しく考えすぎないように。ちょっと外に出て何かしてみなさい」というようなことを言っていることに私は気づいた。私は、形式的な正しさに対する過剰な清教徒的な考えのために、例えば私の学生時代に RCA<sup>iv</sup>で妨害があったように、彼らの楽しみや熱狂が永遠に続いてほしいとは望まなかった。再び彼らが活動しはじめると、私たちは厳格に彼らの作品にたいする議論を行った。しかしそれはその目標に達するための激励になったのだ。

それは私を別の困難へと導いた。ある人を生産的な仕事と理論的で脱構築的な仕事との両方で同時に動かすのは、じつに難しいことである。それは不可能だとは言わないが、人はふつうわずかに優位な方をとる。学習の後には、休みの時間を必要とする。それはまるで、いくつもの変化や、新たなアプローチのためであり、身に染みて分かるためのようであった。さらに、新たに作り変えられた理解は、こだわらなければならないと感じるようないくつかの外側の理論のための情報ではなく、生産的な実践のための情報となるのである。こだわらなければならないと感じるという一連の症状は、実践に対する学生の死につながる。つまり独善的な教授理論は常に、不自然な実践、あるいは不愉快な実践—それはしばしば考えたり、感じたり、欲したりするよりもむしろ、義務の感覚からなされる—から生まれる。加えて教師たちは、自分たちが口を開く前であってさえ、自分たちを取り囲む「義務感」を決して過小評価すべきではない。私は、子どもたちが楽しみたいと思っているとき、「義務感」に耐えられず、彼らにとって本当は何の意味もない「正しい」考えを滔々と話さしてしまうのである。そうになってしまうのは、既に彼らにとって何らかの意味をなす、彼ら自身の考えが第一に扱われないからだ。アルバラードは、学生たち自身の経験は十分ではないと述べている。しかし彼らの経験はけっして消えないだろうし、もし学生たち自身の考えがまず一番に取り上げられるのでないのなら、彼らは防護壁を作り、あなたが彼らにどんなことを教えようとしてもそれを拒むだろう。さらにアルバラードが言っているのは、基本的には、私たちは学生たち自身の経験から始めることはできない、なぜならその経験は断片的であり、観念的でくだらないようなものだからということである。では、そういうこと以外のどこからイデオロギーについて教えはじめたらよりよいのだろうか。アルバラードが言うとおりのなら、イデオロギーを教えていかなければ、それは常にどこか他の人たちが考えるものだということになってしまい、その人たちがなぜ「虚偽」や「プロパガンダ」のようなものを信じるのかということに対する唯一の可能な説明は、その人たちがばかだから、ということになってしまう。この単一の、絶望的に反動的な考えこそ、いろんな学生たちを教えるなかで、私が他の何よりも繰り返し出会った考えである。さらに私は、こうした考えがもっと早く氷解しない理由は、多くの教師たちもまたひそかに、あるいは無意識に、この考えを信じているからではないかと考え始めている。イデオロギーは誰もが必要とするものである。また、教師のイデオロギーこそ、権力や優越感にたいするへつらいの感覚を伴うし、教師にとって最も誘惑的なもののひとつである。もしあなたがラディカルなことを教えているのなら、この権力の位置にあることが、今日では、疑わしい「イデオロギー的正統」となったようにみえるだろう。しかし私は時々、理論家たちの正しさの感覚は、まさに彼らが教える人だからなのではないかと疑ってしまう。そして理論家たちのほとんどは、自分の言うことが何でも「正しい」ものとなる立場

にいる。なぜなら彼らは教師であり、権力を持っているからである。彼らがそう言うのだからそれは正しいのである。アルバードはこの論文を不十分だと見なすかもしれない。なぜならこの論文は私個人の経験に基づいているように見えるからである。しかし彼の誤りは、そもそも経験と理論がまるで別のものだと述べようとするところにある。私たちは主体の位置づけについてのあらゆる理論がすべて、<sup>イデオロギカル</sup>観念的で社会的な編制を介していると信じているのだろうか。あるいは信じていないのだろうか。もし私たちがそう信じていないのなら、私たちが教えていることは、概して学生たちの人生経験と関連するだけでなく、私たちの教育における彼らの経験とも関連するということを経験しなければならぬ。また私たち自身の教育の方法は、彼らを教える私たち教師の経験によって等しく影響されたイデオロギーなのだとすることを認識しなければならないのである。

---

【訳注】脚注に挙げたものはすべて原注である。

- i イギリスの民間放送局 ITV (Independent Television) が放送している連続テレビドラマ。1960年12月9日初回～現在。脚本：トニー・ウォーレン。
- ii イギリスの民間放送局 (ATV: Associated Television (1964-1981), Central Independent Television (1982-1988), Carlton Television (2001-2003)) が放送した、パーミンガムのモーテルを舞台とする連続テレビドラマ。
- iii 3つともイギリスの主要な日刊タブロイド紙。
- iv ウィリアムスンが哲学思想を学び、のちに教鞭をとることになる王立芸術学院のことと思われる。  
(広島大学大学院博士課程後期3年)